

小学校教室で使える英語音声学

松土 清

Simplified Phonetics Applicable to Elementary School English

MATSUDO Kiyoshi

Abstract

In 2020, English education changed in all public elementary schools in Japan. Now, English education starts at third grade and is taught more formally as a subject to fifth and sixth graders. This national reform with new curriculum needs to be further developed and improved due to the large impact it has on English education. This paper analyzes the new course of study, focusing on pronunciation instruction, and then examines the teacher training strategy of the government and the prefecture. To examine the efficacy of the changes, elementary school teachers' attitudes toward the new curriculum were studied through discussion, surveys, and classroom visits at local elementary schools. The findings suggest that early foreign language education will be more effective if easy phonetic explanations are added to chants and phonic activities. With these skills, teachers become more confident, which can elicit better reactions from the students. This paper concludes that the skills of performing chants, understanding phonics, and giving simplified phonetic explanations should be taught in teacher training courses in university and should be reinforced at seminars for in-service teachers.

キーワード：小学校学習指導要領「外国語活動・外国語」、チャンツ、フォニックス、小学生向けの音声学
key words: government course guidelines, chants, phonics, simplified phonetic explanations

1 はじめに

近年の流通経済のグローバル化の加速やインターネット利用者の急増が拍車をかけ、広域コミュニケーション・ツールとしての英語のニーズが世界中で急騰した。アジア諸国においても、英語のコミュニケーション・ツールとしての認識が高まり、各国の学校で積極的に学ばれ、そして学校外では積極的に使われている。シンガポール、インド、フィリピンなどの英語公用語国においてはずっと以前から英語は教育言語であるが、その他の英語国際語国でも早期からの英語教育が実施されてきた。アジア諸国においては、英語学習の目的自体が、かつての英米文化の理解や受容から離れ、技術革新や経済発展など国家戦略の武器としての英語習得へと移行した。

日本における今後の英語教育の起点は、平成29年版内閣府白書『子供・若者白書』、第6章「創造的な未来を切り拓く子供・若者の応援」において、「グローバル化が急速に進展する中で、外国語によるコミュニケーション能力は、これまでのように一部の業種や職種だけでなく、生涯にわたる様々な場面で必要とされることが想定され、その能力の向上が課題となっている。」と示されており、これは、学習指導要領解説の中学年の外国語活動の導入の趣旨と要点になっている。

本論文では、2018年度2019年度の移行期を経て2020年度から完全実施されている小学校学習指導要領の目標に照らし、小学校の外国語活動・外国語科における音声指導に着目し、その留意点や指導方法の改善の可能性について検討した。教

員免許更新講習における小学校教員との討論、小学校校内研修会に招致された際の意見交換会、また公立小学校の学校評議員として参観した多くの授業観察をととして、課題を抽出した。そして、それらの中から音声指導を焦点化し、課題解決のための試案として、チャンツ、フォニックス、「小学生向けの英語音声学」を提案し、小学校教員のスキルアップのための校内外の研修、さらに大学教職課程への導入の可能性について論じる。

2 学習指導要領の改訂

平成28年12月の中央教育審議会答申を踏まえ、「子供たちが未来社会を切り拓くための資質・能力を一層確実に育成すること」の具体的方策の1つの柱として「外国語によるコミュニケーション能力の向上」が掲げられた。そしてその学習指導要領等の理念を実現するための必要な方策として、小学校中学年への外国語活動及び高学年への外国語科が新設された。ここでは、小学校における新教育課程の内容と学習指導要領における音声指導の変化について概説する。

2. 1 学習指導要領の改訂の概要

小学校中学年の英語は年35時間の「外国語活動」とする。「活動」なので教科ではなく評定を付すこともないが、週1～2回程度は英語に触れる機会がある。基本的に担任の先生が英語を教える形になる。

3年生の授業の中では、挨拶や名前の言い方、表情やジェスチャーをつけた挨拶、数の数え方や尋ね方、好きな色や物・スポーツや果物の説明、アルファベットの大文字、身の回りの物の説明などが組み込まれている。

4年生の授業の中では、天気や好きな遊び、曜日・時刻の言い方・尋ね方、持ち物や文房具の名前や尋ね方、アルファベットの小文字、食材や欲しい物の言い方などが組み込まれている。

小学校高学年では教科として年70時間の「英語」とする。「聞く」「話す」に加え「読む」「書く」が加わり4技能を使った言語活動が行われる。また、教科になるため評定が付され通知表にも記載

される。高学年では担任の先生＋専科教員で英語を教えていくのが基本形となる。

5年生の授業の中では、自己紹介、祭りや行事に関するまとまりのある話を聞いて理解すること、尋ねたり書き写したりすること、世界の同世代の子どもたちの学校生活に関する話を聞いて相違点や共通点を聞き取ること、一日の生活についてまとまりのある話を聞いて順序立てて書いたり伝え合うこと、旅行プランの説明を聞いて具体的な情報を聞き取ること、ある物の場所や位置関係についての説明を聞いて概要を把握、説明したり書き写したりすること、丁寧な表現を使って注文をしたり、値段を尋ねたりすることなどが組み込まれている。

6年生の授業の中では、自己紹介に関する表現や発音、音声で語句を書き写すこと、日本文化を表す表現や日本文化について伝えあい、書き写したりすること、好きなもの、スポーツなどの語順を考えること、単語と単語のスペースに気付くこと、地域の良さを表す表現について伝えようとしたり、読んだり書いたりすること、過去の表現について（夏休みの思い出など）話したり、書き写したりすること、小学校6年間の思い出について語句や基本的な表現を用いて書いたり伝えたりすること、将来の夢を話すこと、中学校の部活動や学校行事などについての表現や、他者に配慮しながら中学校生活について読んだり書いたりすることなどが組み込まれている。

2. 2 音声指導の取り扱いの変化

ここでは、現行の学習指導要領の「中学年の外国語活動の導入の趣旨と要点」からの抽出を示し、平成23年度から高学年において外国語活動を導入した旧学習指導要領の成果と課題を踏まえた上で、平成29年告示の現行の学習指導要領における「音声」の位置づけや扱いにどのような変化が見られたかについて示す。

第1部 外国語活動 第1章 総説、2 中学年の外国語活動の導入の趣旨と要点 (P7)

・小学校では、平成23年度から高学年において外国語活動が導入され、その充実により、児童の高い学習意欲、中学生の外国語教育に対する積極性の向上といった成果が認められている。一方で、①音声中心で学んだことが、中学校の段階で音声から文字への学習に円滑に接続されていない、②日本語と英語の音声の違いや英語の発音と綴りの関係、文構造の学習において課題がある、③高学年は、児童の抽象的な思考力が高まる段階であり、より体系的な学習が求められることなどが課題として指摘されている。(中略)

・こうした成果と課題を踏まえ、今回の改訂では、小学校中学年から外国語活動を導入し、「聞くこと」、「話すこと」を中心とした活動を通じて外国語に慣れ親しみ外国語学習への動機付けを高めた上で、高学年から発達の段階に応じて段階的に文字を「読むこと」、「書くこと」を加えて総合的・系統的に扱う教科学習を行うとともに、中学校への接続を図ることを重視することとしている。

第2章 外国語活動の目標及び内容、1 外国語活動の目標 (P13)

今回の改訂では、育成を目指す資質・能力の三つの柱である「知識及び技能」、「思考力、判断力、表現力等」及び「学びに向かう力、人間性等」のそれぞれに関わる目標を、以下(1)(2)(3)のように明確に設定している。(1)外国語を通して、言語や文化について体験的に理解を深め、日本語と外国語との音声の違い等に気付くとともに、外国語の音声や基本的な表現に慣れ親しむようにする。

旧指導要領の「慣れ親しむとともに、違いを知る」という表記が、新指導要領においては、「違い等に気付くとともに、慣れ親しむ」というように、提示の順番が入れ替わった。これは些細な変化であるはずがない。些細な事項ならそもそも敢えて入れ替える必要もなかったはずである。旧指導要領でゴールに設定していた「気付くこと」を、音声指導のスタート地点に据えたことを、そのま

ま到達目標の引き上げと結論するのは早計であるかもしれないが、現場の指導者の視点からは、「慣れ親しむ」よりも「違い等に気付く」という成果基準の方が児童の英語学習の着火点として捉えやすいことは確かである。

なお、「違いに気付く」と「慣れ親しむ」については、第2章 外国語活動の目標及び内容、第1節 外国語活動の目標 (P14) において次のように説明されている。

「日本語と外国語との音声の違い等に気付く」とは、日本語と外国語を比較することで、日本語と外国語との音声の違い等に気付かせることを指している。日本語の音声の特徴を意識させながら、外国語を用いたコミュニケーションを通して、日本語の使用だけでは気付くことが難しい日本語の音声の特徴や言葉の仕組みへの気付きを促すことにより、日本語についての理解を深めることができる。さらに、このことは言葉の豊かさに気付かせ、外国語学習への意欲の向上や、高学年の外国語科で育成を目指す資質・能力の向上にも資すると考えられる。

ここでは、「外国語の音声や基本的な表現に慣れ親しむ」とは、高学年以降の外国語学習における聞く力や話す力につながるものとして、児童の柔軟な適応力を生かして、外国語の音声や基本的な表現に慣れ親しむことを示しており、副効果としての日本語の再認識まで言及されている。

3 小学校教員の意識

新しい学習指導要領の内容が明らかになった直後に、山梨県峡西南地区の校長研修会(2017年7月)に招致された。意見交換会においては、他教科との授業時間数調整や効果的なモジュールの設定など、移行措置をどのように取り入れていくかということについて、管理職の立場での教務実務の話題が続出した。その後、小学校の校内研修会(2017年9月)に招致された際の意見交換会では、英語教育の推進の背景から具体的な指導力向上の方法に至るまで、現場教師の視点から幅広い意見

を聴取することが出来た。ここでは、教員免許更新講習(2019年7月)における小学校教員の討論、現職教員アンケート(2019年10月)、及び小学校における参観授業(2019年9月)について紹介する。

3. 1 小学校教員の討論から

免許更新講習に参加した教員たちは2018年度からの「移行措置」を経験してはいるものの、外国語活動の低学年化と外国語科の新設についての総論的な発言が多かった。

肯定的な意見を集約すると次のようになる。

○小・中・高校を通しての英語の履修時間が増え、時間数に比例した成果が期待できる。

○コミュニケーション能力が向上し、その能力は国語の学習にも波及する。

○小学生から英語を学ぶことで、グローバルな視野を広げることができる。

○同じ教科書を使用し、指導方法を統一することで、学校間格差や地域格差、さらには家庭の経済力による格差を抑制し、中学校での英語の授業につながりやすくなる。

一方、次のような課題を指摘する意見もあった。

△英語の時間を増やすことにより、他の教科の時間が削られる。

△母国語である日本語の習得も不完全な段階で外国語を学ぶことを危惧する。

△思考言語は日本語である。日本人としてのアイデンティティを確立する方を優先すべきである。

△小学校の教師は、学級運営や授業の準備などの多岐に及ぶ業務を一人で担っており、そこに英語の負荷が加わる余裕がない。

△担任が英語の授業を受け持つことに対して指導に不安を感じている。

3. 2 アンケート調査

2019年10月に、県内小学校の25名の現職教員にアンケートを依頼した。先述の小学校教員との討論では、制度に関する総論的な発言が多かったことを踏まえ、授業実施者としての具体的な各論に一步踏み込んで質問した。以下に、その一部と各回答数を示す。

どの点について特に課題があると思いますか？あるいは不安を感じますか？(複数選択可)

- | | |
|------------------|----|
| 1 授業案の作成 | 5 |
| 2 評価の仕方 | 10 |
| 3 ゲームなどのアクティビティー | 0 |
| 4 ALTとのコミュニケーション | 9 |
| 5 文字の指導 | 0 |
| 6 発音の指導 | 17 |
| 7 クラスルーム・イングリッシュ | 9 |
| 8 ICTの活用 | 4 |
| 9 その他() | |

「スピーキングとリスニングは実技科目」という視点についてどう考えますか？

- | | |
|--------------|----|
| 1 そう思う。 | 22 |
| 2 どちらともいえない。 | 3 |
| 3 そう思わない。 | 0 |

指導方法の開発・改善のために、次のどの項目に関心がありますか？(複数選択可)

- | | |
|----------------------------------|----|
| 1 自校他校にかかわらず、優れた実践をしている授業を参観したい。 | 18 |
| 2 視聴覚教材を豊富に揃えたい。 | 6 |
| 3 基本的な英語音やアクセントなど、自分の英語の質を高めたい。 | 15 |
| 4 自分のICT活用能力を高めたい。 | 6 |
| 5 指導力向上のための研修を多く設定してほしい。 | 8 |
| 6 その他() | |

以下には「小学校英語」について、自由にご意見等をお書きください。

回答結果を見ると、未経験の領域である評価方法に一定数の人が不安を感じているが、全体としては、ALTとのコミュニケーション、クラスルーム・イングリッシュなど、自分自身の英語運用力に自信がないことや発音の指導への不安に集中している。

スピーキングとリスニングは実技科目という視点については、十分な説明もなく単刀直入な設問であったことが反省点であるが、同意する回答が多かった。

指導方法の開発・改善については、優れた実践の参観や、研修参加への意欲など、向上心の高さ

が数字に表れている。

次に、自由な意見欄に記載されていた意見を記す。

- ・地域や学校による格差が懸念される。
- ・英語は担任の指導力の差が大きい。
- ・英語の専科教員の配置を強く望む。
- ・子どもたちと一緒に英語をおぼえてしまいたい。
- ・研修の充実と研修に参加できる環境づくりが欲しい。

中高に連結していく10年間の英語教育の導入期を担う小学校英語の役割は大きい。しかし、多くの小学校は教科専任性ではなく、学級担任が授業をすることが一般的である。小学校の中堅現職教員の多くは、文法訳読式を主軸とした英語教育を受けてきたはずである。また、小学校教員が大学教職課程の中でも、副免許取得のために英語音声

学を学んだとしても、その内容は学術性が高く、小学校の英語授業における音声指導まで想定されていない。「読む」「書く」を基軸に英語を学んできた小学校教師が、小学生に「聞く」「話す」を教えるとなると、最初は戸惑いを覚えるのは当然である。アンケートの結果は、想定したとおりの傾向を示している。

3. 3 中学年外国語活動の参観

筆者は、新指導要領移行期内の2年間、県内のある公立小学校の学校評議員として多くの授業参観をする機会に恵まれた。以下は4年生の外国語活動の授業を参観した時の状況である。指導者：20代女性 学習者：4年生（男子18名、女子9名）
テキスト：『Let's Try! ②』
学習指導案は略式であり、原本資料のとおりに記載する。

4年18回目 『Let's try 2』Unit 5 1/2時 【文房具 Do you have a pen?】

時 間	児童の活動	指導者の活動 H:HRT A:ALT	準 備 品
Let's start. (5)	あいさつをする。 今日学ぶことを知る。	Greeting H: Hello everyone! How are you? H: Today's topics are ①song ②bingo game ③Let's listen. ④speech.	
Let's review. (5)	歌を歌う。	H: Let's listen to ABC song. Do you remember this song? A: 児童といっしょに歌う。	
Let's try.① (10)	BINGOをする。	H: Let's do BINGO game! Please choose 9 cards. (文房具) A: Are you ready?	文房具 ピクチャーカード
Let's chant. (10)	Cha cha cha, Chants DVDに合わせてリピートする。	H: It's Chant time. Let's watch the DVD. A: Let's say it together. ♪ Do you have a pen? ♪ Do you have a pen? Yes, I do. Do you have an eraser? No, I don't.	
Let's try.② (10)	友達のために作ったお道具箱について発表する。 何人か代表で発表する。 時間により、グループ発表にかえる。	H: Let's speak. Do you have presents for your friends? A: 《Demonstration》 This is for ○○. I have □□. pencil, pencil case, ruler, glue stick marker, notebook, stapler, magnet ○○ likes □□. S: This is for ○○. I have □□. ○○ likes □□.	
Let's finish. (5)	感想を言う。 ナイスコメントカードを書く。 あいさつをする。	H: 児童に感想を聞く。 A: 児童をほめる。MVPを決める。 Greeting	ナイスコメント カード

3. 4 参観授業における児童の反応と課題

小学生たちは、文字に頼らない真似がうまく、聴覚発声器官の柔軟さにはいつも驚かされる。この授業における4年生児童たちも、機械的反復にあきることなく上手にモデル音に反応をしていた。早期英語教育における音声指導の有効性を示した数々の先行研究を再認識させる児童たちの姿だった。以下に参観授業の様子を、音声指導に特化して記す。

教師は

—教師がIT機器の使用に習熟しており、授業に滞りがなかった。

—教師が大きな声で指導していることが児童たちの積極的な発声を促していた。

—授業展開の順序を定型化することにより、少ない指示で活動がコントロールされていた。

—教師は抽出した音素を児童に意識させるために、その部分を誇張して発音していた。

児童たちは

—真似して発音するという活動を好んで行った。

—音声の模倣は遊び感覚であり、英語の音声へ親しみを感じていた。

—教師が抽出音素を誇張すると、児童たちもそのまま誇張して反復していた。

音声指導について

(教科書に加え、教師自作の補助教材による指導の部分も含む。)

文房具の英語の指導において、教師は「pencil」を発音し、最初は単純なリピートを要求した。その時は、児童たちの口からは/p/の音素はほとんど聞こえず「ペ」というカタカナ音だけだった。次に、教師が「pencil」の語頭の/p/を強調するために唇を大きく動かして破裂音を実演して見せると、児童たちも教師の真似をして/p/の破裂を大きくして発音することができた。「pencil」で音素を意識した児童たちは、授業後半の「picture」についても破裂音の意識が十分に持続していた。語頭の子音1つを正しく調音しただけで、カタカナ音の「ペンシル、ピクチャー」とは異なる英語音をつくることができることを児童たちも実感できたはずである。

発音を中心とした授業を行うことで、児童はより発音に着目するようになる。発音は発話に直結するので、積極的に自分の意志を伝える態度の育成に有効である。中高生と異なり、小学生は人前で話すことに対する抵抗感が低い。また自分が発音できた時に、そのことを周囲の同級生に誇示したがる様子が見えた。これは英語学習の低年齢化の大きなメリットであろう。

一方、この授業の音声指導の中にもいくつかの改善を要する場面があった。例えば、抽出した音を強調するあまり、正しいアクセントの位置がずれることがあったこと、そして「pencil」のアクセントを強弱で表現すれば自然な英語音になる場面で、音階のようにアクセントを高低で表現しようとしたことである。

また、別の参観授業のひとつにおいて、授業のまとめの時間に教師がカタカナに近い音で上塗りをして、その授業のデジタル教材による調音の成果を損ねるという場面に遭遇した。このような熱心なあまりの落とし穴は、家庭内にも潜在的に存在する。子どもの英語教育に関心のある保護者がカタカナ英語で子どもが習得した英語音に上塗りするようなことはないだろうか。

3. 5 高学年の公開授業における保護者の反応

小学校の各学年の様々な科目の授業を参観する中で、小学校6年生の英語の授業に保護者たちと共に参加した。クラス全員の子どもたちがI like ~. I want to be a ~. と2つの英文で発表する場面があった。大きな声で自分の将来の夢を英語で述べる児童の姿に、保護者たちは、我が子よその子を問わず一様に感動し、発表が終わるまでざわめきが止まらなかった。保護者達の小学校時代には存在しなかった英語の授業に感動した保護者たちは、小学校への英語の導入を大いに歓迎し、さらなる期待を膨らませたにちがいない。

小学校の英語授業で取り扱う語彙や文は保護者も十分に分かっている内容であるが、デジタル教材を使ったモデル発音や発音指導は目新しい学習活動であり、保護者が自らの中高時代に受けた英語授業との差が顕著な部分である。参観授業など

の折に、「小学生向けの英語音声学」の一部を意図的に仕組むことにより、保護者の意識変革も促すことができる。それが連鎖することにより、小学生の正しい英語発音のための環境が強化されることを期待する。

4 小学校における音声指導について

新指導要領では、日本語と英語の「音声」の違いに気づき、その上で慣れ親しんでいくことが新たに求められている。英語はコミュニケーションのツールとして、国外との交流や異文化の理解のための鍵である。小学校中学年は児童たちにとって世界への扉を開かせる大事な時期である。指導者たちが音声指導のスキルを向上させることにより、授業に楽しさと精度の両方を担保したいものである。ここでは、小学生に教えたいチャンツ、フォニックス、「小学生向けの音声学」に着目し、その有効性と実践方法について検討する。

4. 1 視聴覚教材の活用

視聴覚教材の活用については、小学校学習指導要領解説 外国語活動・外国語編、3 指導計画の作成と内容の取扱い、(1) 指導計画の作成上の配慮事項、(2) 内容の取扱い (p52) には次のように示されている。

オ 児童が身に付けるべき資質・能力や児童の実態、教材の内容などに応じて、視聴覚教材やコンピュータ、情報通信ネットワーク、教育機器などを有効活用し、児童の興味・関心をより高め、指導の効率化や言語活動の更なる充実を図るようにすること。

指導に当たり、児童の関心を高め、主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善につながるよう、活動に応じたデジタル教材等の活用が考えられる。例えば、児童がコミュニケーションの目的や場面、状況等を意識した活動を行うことが重要であるが、その際、視聴覚教材などを用いて、実際にコミュニケーションが行われている様子を示すことは、活動を行う際の生きたモデルとなること

に加え、コミュニケーションの働きも意識できるため、児童の興味・関心を高める上でも極めて有効である。また、音声中心である外国語活動において、ネイティブスピーカーや英語が堪能な人の協力が得にくい学校や地域もありうることや、ジェスチャーや表情などの非言語的視覚情報もコミュニケーションを図る際には大切な要素となってくることを踏まえると、CDやDVDなどの視聴覚教材の積極的な活用も有効である。

また、リズムや音素については、『小学校学習指導要領解説 外国語活動・外国語編』に次のように具体的に示されている。

第2章 〔第3学年及び第4学年〕〔知識及び技能〕、(1) 英語の特徴等に関する事項 イ (ア) 英語の音声やリズムなどに慣れ親しむとともに、日本語との違いを知り、言葉の面白さや豊かさに気付くこと。

外国語活動においては、多くの表現を覚えたり、細かい文構造などに関する抽象的な概念について理解したりすることを目指していない。一方、音声面に関しては、児童の柔軟な適応力を十分生かすことが可能である。そこで、外国語活動では、英語の音声やリズムなどに慣れ親しませることが大切になる。例えば、日本語のミルク (mi-ru-ku) は3音節であるが、英語のmilkは1音節である。これを日本語のようなリズムで発音すると、英語に聞こえず、意味も伝わらない。そこで、実際に英語で歌ったりチャンツをしたりすることを通して、英語特有のリズムやイントネーションを体得することにより、児童が日本語と英語との音声面等の違いに気付くことになる。

また、例えば、狐(動物)を表すfoxということにより、児童は日本語にない / f / や / ks / の音に触れたり、慣れ親しんだりすることになる。さらに、日本語と英語では同じ動物でも鳴き声の表し方が似ているものもあれば全

く異なるものがあることに気付いていく。このような体験を通して、日本語との違いを知ること、言葉の面白さや豊かさに気付かせることが大切である。

4. 2 チャンツ

小学校現場の教師は、音声指導にどう取り組むかについて、自らの英語学習経験と直感だけを頼りに模索していくわけにはいかない。学習指導要領の中で繰り返し述べられているチャンツなどのスキルを身につけ、授業に効果的に組み込んでいくことが求められている。

チャンツは、単語や句・文を一定のリズムに乗せて繰り返すことで、言葉を覚え、正しいアクセントやイントネーションを鍛えるための効果的な方法である。参観授業でも児童たちはこの活動をととても楽しんでおり、外国語の学習中であることさえ忘れて音楽のラップを楽しんでいるかのようであった。音節を細かく分けて音程まで付したようなカタカナ英語から脱却でき、英語全体のリズムを体で覚えることにより、将来的に通じやすい英語の話者になることが期待できる。

・ ● ・ ● ● ●

Do you have a pen? Yes, I do.

・ ● ・ ● ● ●

Do you have an eraser? No, I don't.

参観授業の中では、文房具の英語を使ってチャンツが行われた。学習指導案の中では「Cha cha cha, Chants」と表記されている部分である。疑問の文と答えの文をテンポよく繰り返しているだけだが、それぞれの文中に2か所ずつアクセントが置かれ、リズムをくずすことのないようにリピートさせる活動だった。児童たちは大きな声で反応し、繰り返せば繰り返すほど真似が上手になり、すぐに体でリズムをとるようになった。まるでラップを歌うように楽しんでリピートしていた。A pen, an eraserの部分がa pencil caseのように長くなっても、音の塊として自然に入れ替わり、全体のリズムがくずれることはなかった。児童たちが飽きることなく取り組み、短時間でその

成果を出すことを目の当たりにすると、「英語の音に慣れ親しむ」象徴的な活動としてチャンツの有効性を再認識する。

4. 3 フォニックス

学習指導要領の中にはフォニックスという用語を使っの説明は特にないが、『小学校外国語活動・外国語 研修ガイドブック』（文部科学省）の「3 英語の目標」に次のような表記を見ることができる。

外国語活動では「文字の読み方」とは、文字の“名称の読み方”と、“文字が持っている音”（例えば、Bという文字は/bi:/という名称と/b/という音を持っている）の両方を指すが、外国語活動では、前者のみを指していることに注意したい。

外国語科では“文字が持っている音”まで加えて指導する。ただし、音と綴りの関係まで指導することを意味するのではないことに留意したい。

この英語で綴られた文字「B」とその音/b/の間にある一定の規則性を用いて、文字の読み書きを容易にする方法はフォニックスと呼ばれる。日本の小学生がひらがなを「50音」で覚えるように、アメリカでは、古くより英語の基礎教育に用いられており、その後は外国から移民した子どもたちのための英語教育にも採用されている。筆者も、まだ教壇に立って間もない頃に、アメリカのTVドラマ「大草原の小さな家（Little House on the Prairie）」の中で、小学校の先生が子供たちにフォニックスを使って教えているシーンに感銘を受けたことを記憶している。真似をして自分の授業に導入したいと願ったものの、当時は資料を入手することもできなかった。最近ではYoutubeや市販DVDなど教材が豊富であり、小中高を問わず発達段階に応じた教材をさがすことが容易にできる。

小学校期にフォニックスで発音のルールを感じ取るにより、未知の単語に出会った時に正し

い発音を推測することができる。韓国及び中国の小学校と日本の小学校を比較すると、指導英単語数の差は指導時間数の差よりもはるかに大きい現状にある。国際競争力の向上は英語力の向上と同義ではないものの、英語学習の時間と分量の決定的なギャップを埋め得る方策を考える時に、未知の単語に出会った時の対処の方法を知ることが大切である。教科書内で身につけたスキルとしてのフォニックスを教科書外で応用することの有効性は期待できる。

ここで、どの発達段階でフォニックスをどこまで教えるかについて考えたい。フォニックスがカバーするルールには、アルファベットの音以外にも学ぶ項目がたくさんあるが、小学校では中学年の外国語活動ではアルファベットの名称の音を教え、高学年の外国語では単語の中で使われるときの音を教えるとなっていることを踏まえ、その範囲のフォニックスを体系的に、また継続的に実施することが肝要である。さらに、その後中学校ではどのようにその続きを教えていくかといった小中の連携については、小中の英語担当教員たちがお互いのカリキュラムを確認し合うなどの作業が必要である。

小学校高学年の外国語科に配分された音声指導の中では、26の母音と24の子音の全てを網羅することや、綴りへの接続まで指導する必要はない。無声音と有声音は口の形の作り方は同じなので対にして教えることができることも考慮すると、フォニックスとして扱うのは最大でも次の子音(と半母音)であろう。

[s] と [z]、[f] と [ʒ]、[p] と [b]、[m]、[t] と [d]、[n]、[k] と [g]、[ŋ]、[f] と [v]、[θ] と [ð]、[tʃ] と [dʒ]、[h]、[l]、[w]、[j]、[r]

フォニックスの導入と言っても、現在行われている指導を根本的に改造する必要など全くない。目標は「外国語の音に違いに気づき、慣れ親しむ」ことである。これらの音を含む単語を教科書の中で新出語として取り扱う時に、フォニックスの手法で教えることが出来る。前述の参観授業の中でも、既にチャンツやフォネックス的な訓練は視聴覚教材の中で多用されていた。

4. 4 小学生向けの英語音声学

音源がデジタル教材であれ、ALTの生の発音であれ、児童たちができることは単なるオウム返しであることに着目したい。そして、英語の発音を耳で聞いただけですぐに正確な発音ができるのは、一部の耳のよい児童であろう。また、1コマの授業の中で1つの発音に配分できる時間には限界があり、児童たちが繰り返しの中から帰納法的に音の違いに気づき、自力でその調音法に気づくのを待つのは非現実的である。この時に、ある抽出した音素について、教師が小学生にも分かりやすい平易な言葉で音の出し方を説明することにより、児童は、発音の仕方を正確に知ることができる。また同時に、音の再生や発音方法を友人に伝達することもできるようになる。この場面で日本人教師が、英語の音の作り方を簡略に説明しながら授業を進行したとしたら、大きな効果が期待できる。母国語の発音方法と対比させながら説明できる点において、日本人教師はネイティブスピーカーを超えた指導をすることが可能である。

英語音声学は、音素、つづり字と発音、子音、母音、音の連続、同化、アクセント、リズム、イントネーションなど、広い分野を扱う学問である。しかし小学校の教室という現実から考えると、これらの項目のすべてを教える必要はない。『小学校外国語活動・外国語 研修ガイドブック』に示されるように、外国語科の中で英語の文字が単語の中でどのように発音されるかを学ぶことが目標である。よって、英語の代表的な音、日本語の発音との差異が大きい象徴的な英語音を抽出して扱うことが合理的である。ここで、小学生に理解できる最小限の説明、「小学生向けの英語音声学」のいくつかを下記の要領で例示する。

まず、一般的な英語音声学の表記を示す。次に、小学校教室用の簡略化した説明を示す。説明の最後に、教師が「○○」ではなくて/○○/というふうにかたかな音と英語音を対比してリピートさせる。この対比については、声を出して言わせるという活動により、日本語と英語の「音声」の違いの気づきを再強化すると同時に、先述の学校

外での「カタカナ音の上塗り」に対して抗体として機能することが期待できる。

/p/ 無声音 両唇 閉鎖音

/p/は気音の点を除いては、日本語の「パ行」の子音と同じ。上下の唇でしっかりと閉鎖をつくる。

上下の唇をしっかりと閉じます。

次に、ピーナッツを30センチくらい飛ばすような感じで/p/と言ってみましょう。

Repeat after me.

/p/、/p/、/pen/

「ペン」じゃなくて/pen/

/t/ 無声音 歯茎 閉鎖音

日本語の「タ」「テ」「ト」の子音は舌先を歯につけるが、英語の/t/は舌先を歯茎につけて閉鎖をつくる。気音を伴うことがある。また、アメリカ英語では、母音と母音に挟まれていて/t/の次が弱いとき、または、little, battleのように/l/の前に/t/がきたときに、/t/は舌尖が歯茎に一瞬だけ触れる歯茎たたき音(tap)で発音され、日本語の「ラ行」の子音と似た発音となる。真似をする必要はないが、聞きとるときに/l/や/r/と聞き間違えないように注意が必要である。

舌の先が今どこにあるかわかりますか？

その舌の先を、上の前歯の裏側の歯茎に当ててみましょう。

次に、舌の力をだらんと抜いてください。

はい、もう一回すばやく舌の先をさっきの前歯の歯茎につけてください。

そしてパッと離します。すばやくできますか？

それでは、その形で、/t/と言ってみましょう。

Repeat after me.

/t/、/t/、/ten/

「テン」じゃなくて/ten/

/h/ 無声音 声門 摩擦音

/h/は常に母音及び半母音/j/、/w/の前の位置に現れ、それらと同じ口のかまえで無声の出だしとなる。したがって/h/は他の摩擦音と違い、それぞれ自身の口のかまえというものを持たない。/h/を発音するときは、口のかまえは次に続く音と同じようになり、声帯が少しだけ開いてささやくように音が出ている。/h/は語末には現れない。

日本語の「ハ」は、どちらかというと口の辺でつくる「声」の音ですが、英語の/h/は「息」の音です。声の音と息の音の違いがわかりますか？

それでは、息の音の練習をしてみましょう。寒いときにみんなの手が冷えてしまいました。どうやって温めますか？

手に息を吹きかけてみましょう。

声だけで「ハ」、「ハ」、温まりませんね。

息を深く吸って手を温めましょう。/ha:/これが息の音です。

Repeat after me.

/h/、/h/、/hæt/

「ハット」じゃなくて/haet/

/w/ 半母音

/w/には決まった舌の位置がなく、/u:/または/u/の付近からすぐ後続の母音へと移行する。後続母音よりも舌の位置が高く、また円唇母音の前では特に唇の丸みが強くなる。

日本語の「ワ」の子音と似ているが、「ワ」の子音は唇の丸みが少ない。

皆さんの唇を小さく丸めることができますか？

皆さんの大好きな飲み物が机の上にあります。それをストローで飲むように口をすばめてみましょう。

少し前に突き出すようにして丸めるとうまくいきますね。

さあ、丸く突き出しながら「お」と言ってみるとどんな音になりますか？

英語の /w/ は日本語にはない音です。

みなさんは、今日は日本語にない音を出せるようになります。

Repeat after me.

/w/、/w/、/wet/

「ウェット」じゃなくて /wet/

5 指導者養成と研修

これまで学習指導要領の音声指導の要点、現場教師の意識、実際の教室内の音声指導の課題などを概説し、小学校教室の音声指導の手がかりとして、「チャンツ」、「フォニックス」、「小学生向けの音声学」の導入を提案した。この章では、現行の指導者養成の仕組みを示し、それらの補完の可能性について論じる。

5. 1 国の指導者養成プラン

グローバル化に対応した英語教育改革実施計画

文部科学省では、初等中等教育段階からのグローバル化に対応した教育環境作りを進めるため、小中高等学校を通じた英語教育改革を計画的に進めるための「英語教育改革実施計画」を平成25年12月に公表した。

2. 新たな英語教育の在り方実現のための体制整備 ○小学校における指導体制強化

- ・小学校英語教育推進リーダーの加配措置
- ・養成研修・専科教員の指導力向上
- ・小学校学級担任の英語指導力向上
- ・研修用映像教材等の開発・提供
- ・教員養成課程・採用の改善充実
- ・小学校における指導体制強化

(課題)

小学校高学年における英語教育の教科化に伴う指導内容の高度化・指導時間増に対応する必要がある中、現状では不足する高度な英語指導力を備えた専科教員としても指導が可能な人材の確保が急務。また、小学校中学年か

らの英語教育（活動型）の開始に伴い、中学年の学級担任も外国語活動の指導を行う必要が生じるため、研修をはじめとした指導体制の大幅な強化が不可欠。

(具体の施策)

- 小学校英語教育推進リーダーの加配措置・養成研修(国)
- 小学校中核教員養成研修(国、県等)
- 専科教員指導力向上研修(国、県等)
- 小学校学級担任英語指導力向上研修(校内研、初任研、免許状更新講習等)(県等)

このシステムを言い換えると、まず、国の専門家が「推進リーダー」を養成する。次に、リーダーが各学校に1人の「中核教員」に研修をする。そして最終的に、校内研修などで中核教員が担任に伝達講習をすることになる。小学校の教員数は多く、全員が研修を直接受けるというのは不可能であることは理解できるが、現場の指導者に伝わるまでに数人が絡むことになる。

英語教員の英語力・指導力強化のための調査研究

2015年9月、文部科学省は同省HP上で、「英語教員の英語力・指導力強化のための調査研究事業」の内容を公表した。小学校教員及び中・高等学校における英語担当教員の教職課程におけるコアカリキュラムを含めたモデル・プログラムの開発に向けた調査研究、及び、効果的な現職教員研修の改善方策等の調査研究を行うことが事業の要旨となっており、この結果が学習指導要領の改訂に生かされるのと同時に、教員養成と現職教員研修の一体的なモデル・プログラムの開発・実証が行われた。

- ・教育委員会が大学と連携して行っている地域の現職教員研修の体制整備状況等の実地調査
- ・各大学の教職課程で行われている中・高等学校外国語の教員養成プログラム(教育職員免許法第5条「教科に関する科目」及び「教職に関する科目」)の実施状況、内容等の調査
- ・大学等における地域の教員養成及び現職教員キャリアアップ支援の体制整備状況等の実地

調査

- ・大学等における中・高等学校の教員養成の現状を調査

上記の各調査を実施し、研修、養成の各段階において活用していくとされたが、大学に直接的な改革が求められたものとして、平成29年11月に教職課程コアカリキュラムの在り方に関する検討会が取りまとめたコアカリキュラムは記憶に新しい。

5. 2 山梨県における外国語研修

教育公務員特例法第22条では、「教育公務員には、研修を受ける機会が与えられなければならない」と規定されており、山梨県においては総合教育センターにおいて各校種多種多様な研修を実施している。また、第22条の2では「教員は、授業に支障のない限り、本属長の承認を受けて、勤

務場所を離れて研修を行うことができる」とされているが、現実問題として、担当する児童・生徒に自習をさせての研修というのは奨励されないことであるし、同僚の協力を得ての時間割変更というのものも想像するほど容易ではない。このような学校現場の教務事情により、総合教育センター主催の研修は夏に集中する傾向にある。

次は山梨県における外国語研修（2019年度）の一覧である。日程の確保、時間の配分、施設のキャパシティなどがよく考慮されており、多くの領域がカバーされており、テーマ也多岐に及んでいる。小学校の外国語指導者研修に相当するものは研修番号271、272、274、276、277、278番である。特に278番の「小 外国語授業力アップ研修会」は小学校の外国語活動・外国語科の指導に特化している。

No.	研 修 会 名	日程	日数	対 象	定員	研 修 内 容
271	小中高特 外国語教育連携研修会	8/7	1.0	小中高特	50	小・中・高の連携を踏まえた外国語教育の在り方や指導の具体について学ぶ研修
272	CAN-DO リストの作成・改善・活用法を学ぶ研修会	7/31	0.5	小中高特	40	CAN-DO リストの目的・作成のポイントに関する講義をとおして、PDCA サイクルに基づく単元設定や構成等について実践的に学ぶ研修
273	英語指導の理論と実践（初級）研修会	8/6	0.5	中高特	20	若手教員を対象に英語指導の理論と実践を学ぶ研修
274	英語指導の理論と実践（中級）研修会	8/6	0.5	小中高特	20	日々の授業に生かせる指導方法と理論を学ぶ研修
275	初任研外国語科指導法演習研修会	7/24	0.5	中高	15	中・高の初任者が外国語教育に関する基礎的な指導法などについて演習をとおして学ぶ研修
276	英語運用スキルアップ研修会	5/28 7/30 10/29	1.5	小中高特	10	主に中堅英語教諭を対象に、演習を通したスキルアップ手法を学び、英語運用力向上を目指す研修
277	英語教育推進リーダー研修会	7/11 8/5 9/19 10/17	2.5	小中高特	225	英語教育推進リーダーによる授業展開の提案とその研究協議をとおして、効果的な言語活動を取り入れた授業について学ぶ研修
278	小 外国語授業力アップ研修会	5/21 7/4 12/5	1.5	小	10	初歩的な英語を用いた指導方法や指導内容に関する講義・演習をとおして、小学校外国語活動・外国語科における具体的な表現活動の指導方法について学ぶ研修
279	英語ディベート指導研修会	8/2	0.5	高	25	英語ディベートを4技能統合活動として授業に取り入れるポイント及びディベート指導力の向上を、演習をとおして学ぶ研修
280	英語指導力向上研修会	6/5 9/31 1/19	1.5	高	60	外部専門家による講義及び演習等により授業改善と生徒の英語コミュニケーション能力養成に資する指導力向上について学ぶ研修

5. 3 研修による補完、教職課程の開発・改善

指導者養成の研修や連携のあり方については、「英語教員の英語力・指導力強化のための調査研究」において、教員の英語力・指導力強化に向けて、教育委員会等と大学等との連携により、事例収集・効果分析、プログラム開発等を通じて教員養成・採用・研修等の在り方の調査研究を行い、得られた成果の普及・活用促進を図り、今後の英語教育改革を踏まえた教員の英語力・指導力を向上するとされている。先述の教員の意識調査の結果及び参観授業から提起される課題を念頭に、国の外国語指導者養成計画と県の研修計画を勘案し、これらを補完する方策として以下を提案する。

小学校の現職教員については、既に、英語の音声指導理論に裏打ちされた優れた音源を駆使して日々授業を実践している。チャンツとフォニックスについても毎時間繰り返して触れている。児童たちと一緒に学ぼうという気にさえなれば、アクセントやリズムも含め自然な英語音を身につけることもできる。個人的に発音能力の向上に努めようと思えば教材は豊富な時代である。このことを前提とすると、現職教員の研修で最大効果を期待できるものは、英語音の作り方の説明ができるような1セットの「小学生向けの英語音声学」を学ぶことに焦点化した研修で補完することがよいだろう。大学主導の研修会でもよいし、教員免許状更新講習に含めてもよい。小学校の教科書に含まれる単語というように範囲を限定すれば、研修の時間的な圧迫は少ないと考える。研修に参加して発音の仕組みの基礎を知ることにより、現職教員たちのコメントに頻出した「自信」という心理的なハードルは自然に低くなると確信する。

大学の教職課程の学生たちにとっては、チャンツ、フォニックス、「小学生向けの英語音声学」とともに新出事項である。まずは座学で必要な知識を得たのちに、これらの有効性を十分に検討し、実技科目であるという意識で繰り返すことによって、教壇に立つ前に一通りのスキルを身につけることが望まれる。もちろん、小学校の教室で実際に使われているデジタル教材を視聴することは大

前提である。この一体化した理論と実践を小学校教員養成課程のカリキュラムの中に位置づけ、シラバスに明記し、獲得した知識ではなく到達したスキルを評価する仕組みが必要となる。あわせて、中高の英語教員養成課程においても同様の仕組みを設定することによって、小学校で培ったものを中高に円滑に接続していくことになる。

本年8月、中教審新しい時代の初等中等教育の在り方特別部会が示した答申の中間まとめ骨子案には、2022年度をめどに小学校高学年からの教科担任制を「本格的に導入する必要がある」と明記された。この案では、算数、理科、英語の3科目において、小学校高学年で学習内容が難しくなることを踏まえ、「中学校への円滑な接続を図ることが求められる」と指摘し、「教科指導の専門性を持った教師によるきめ細かな指導を可能とする教科担任制により、学習内容の定着度の向上と学びの高度化を図ることが重要」と導入を求めている。また、人材確保については、教職を目指す学生が小学校と中学校の免許状を取得しやすくするため、小学校と中学校の教職課程で授業科目を共通に開設できる特例を設ける、また、現職の中学教員が小学校の免許を取りやすくしたりする制度改正を求めるなど、「必要な教員定数の確保に向けた検討の具体化を図る必要がある」と言及した。教職課程を置く大学では、このような制度改正の今後の動向を注視し、後れることなく教育課程を進化させていく必要がある。

6 まとめ

長い間、日本人は英語の「聞く・話す」が苦手とされてきた。英語をコミュニケーション・ツールとして機能させるためには、母音主体のカタカナ音から脱却すること、日本語のテンポとは全く異なる英語のリズムに慣れること、第1アクセントを強調し高低ではなく強弱でアクセントをつけること、声で音を作らず、息で発音することなど、児童・生徒に身に付けさせたい事項がいくつかある。しかしながら、これらをプロセスとしての学習項目と捉えず、正しい音声指導の結果として自然に到達するゴールと捉えたい。

今般、全国一律に小学校の英語学習の機会が大幅に拡大され、「音声」の識別に敏感で、教師の仕掛けに柔軟に反応する小学校期に、英語の音声に親しみ、母語との違いに気付き、楽しみながら英語を身に付けさせるようになったことの意義は大きい。学習の習熟度と家庭の社会経済的背景との相関については教育課題としてよく話題になる。しかしながら英語の習熟に関して言えば、公立小学校でも適切な音声指導を組み込むことにより格差を防ぐことは可能である。「リスニングとスピーキングは実技科目」という前提で考えれば、リスニング能力やスピーキング能力と相関の高い要素は、親の社会経済力の差ではなく、児童自身が正しい音を「何回繰り返したか」という回数の差であろう。

学習指導要領の改訂、あるいは新しい制度の導入が行われると、すぐに目に見える成果が求められるが、教育には即効性は求められない。また、短期の数値目標もなじまない。制度の導入を目的化せず、制度が道具ならその道具で何を作るか、制度が車なら子供たちを乗せてどこに向かうかということに意識を集中すべきである。新制度の導入はスタート地点であるという認識を社会全体で共有し、教育の成果の鍵を握っている最前線の教員の思いや現場の実情に目を向け、最大限の後方支援をしたいものである。

今回の新学習指導要領の完全実施は2020年であるが、先行実施や移行措置が始まった頃から小学校の教室の空気が変わってきたと感じている。教員の意識が変われば授業が変わる。授業が変われば子供たちの質が変わる。小学校で実技として身につけた英語音は、中高での継続学習を経て、将来において結実を迎えることだろう。

本稿は、現在の小学校教室での英語音声指導における課題を取り上げ、それらの解決方法としての、チャンツ、フォニックス、「小学生向きの英語音声学」に着目し、その有効性や可能性について検討した。これらのスキルを、発達段階に合わせて工夫して授業に導入していくことは、学習指導要領に示される小中高の外国語学習の目標達成の基盤となるはずである。これらの音声指導法を

現場で活用・実践している好事例を発掘し、合理的な指導法のさらなる開発・改善の研究を進めていきたい。

参考文献・資料

- (2017)『平成29年版 子供・若者白書(全体版)』内閣府HP
- (2017)『小学校外国語活動・外国語 研修ガイドブック』文部科学省
- (2017)『小学校学習指導要領』文部科学省
- (2017)『小学校学習指導要領解説 外国語活動・外国語編』文部科学省
- (2015)『英語教員の英語力・指導力強化のための調査研究事業』文部科学省HP
- (2019)『2019年度総合教育センター研修一覧』山梨県教育委員会
- (2020)『中教審答申中間まとめ骨子案』中教審新しい時代の初等中等教育の在り方特別部会
- 竹林滋他(2013)改訂新版『初級英語音声学』大修館書店
- 河添恵子(2005)『アジア英語教育最前線』三修社